

コンクリートのうちっばなしである。その寒々しさを強調して飼育塔は、研究塔から不便としか思えないほど遠く離れてもいた。辺りに建物はない。緩やかなカーブを描く山々だけが囲むように連なっていた。

続く丘の中腹で見回し、わたしは一息つく。

まだ誰も気づいていない。

一人ごち、その目を再び目指す飼育塔へ向けた。

ここでわたしの役割は「助手」ということになっていく。もぐりこめたのは他の部署がたいそうな工作を行ってくれたせい、それはもう二カ月も前の話だった。そのとき飼育塔は研究塔のそばにあり、丸太づくりの外観がお菓子の家かと思うほど可愛らしかったことを思い出す。

そこにヒツジはたったの一头、積み重ねた研究成果を蓄え飼われていた。入れ代わり立ち代わり世話する研究員たちの姿はほほえましく、ヒツジをひどく丁寧に扱うありさまはヒツジこそ彼らのアイドルと言わんばかりで、それは産業スパイとしてもぐりこんだわたしの立場に違和感を覚えさせるほど和やかな光景でもあった。

ともかく我が社とここが「それ」を操作すべく始めた研究に行き詰まが生じたのは同時期で、わたしの起用も

このうえないタイミングだったと振り返る。何しろわたしのもぐり込む二日前、ここはついにヒツジを媒体として実験を行っていたというのだ。

成果を確認するまでしばらく。

成功したものの歓喜は続かず、まもなくヒツジはそれも容易く扱えるものでなくなる、数日のうちにも飼育塔は遠ざけられ、せねばならぬほどと職員たちは「それ」に追いつめられることとなっていった。つまるところ操作すべく「それ」に持たせた繁殖力が凄まじ過ぎたのである。

一度、浸潤されると素早く深い「それ」に気づくことは難しいらしい。剥がすどころかそれが己のものなのかそうでないのか区別はできず、それら混濁の果てにあの妄想は訪れて、すでに犯されたと自覚する職員たちは「己とヒツジのさかいが曖昧になってゆく」と怯えている。一方で、さかいがなくなりつつあるからこそヒツジへの愛着はなおさら増すと、異常なまでの執着をみせつけ、繰り出す奇行で他の職員をパニックへと陥れていた。目の当りにしたからこそわたしは一部始終を本社へ報告している。引き換えに与えられた指示が、研究の持ち出しとヒツジの処分、この二つだった。

丘を登る。

飼育塔を目指し、再び電動カートのアクセルを踏み込んだ。

目立つヘッドライトを消したせいで包み込む闇には背負う義務感が滲み出し、いや使命感で張り詰めていると言った方がしっくりくるか、わたしは潰されまいと両肩を張って前方を睨みつける。

カートの荷台では使う予定にあるライフル銃が、さきほどから鈍い音を立て揺れていた。隠して上へはレシピ通り、栄養剤を混ぜ込んだワラを山とかぶせている。だが双方はハナからこのたくらみに乗り気でないらしい。もう何度目か、この職員はもう愛着に振り回されるがままヒツジを持って余すと飼育塔を遠ざけるばかりで、この期に及んで何ら手を下せなくなっているじゃないか、なだめて言い聞かせている。代わりにわたしがヒツジを始末したところで、そんな彼らこそほっとするに違いない、わたしはといえば全うした指示に本社から見合うだけの待遇を得て全てが丸く収まるのだ、と話しかけていた。

だがひとつ、だ。

ここには一つだけ、妙な点が残されている。

何しろライフル銃を隠すべくワラをかぶせたところで、この時間帯にワラを補填する業務などありはず、膨れ上がった愛着の果てに今や限られた餌やりの時間は争奪戦だ。無断で飼育塔へ向かう理由が餌を与えるためだった、などと言ったところで通る理由になるはずもなく、知っていてなぜワラを選んでかぶせてしまったのか。まるで説明がつかない。

他に使い道があるのだろうか。

どこかでそう予感している。そのためにも栄養剤さえ混ぜ込むと、山と積み込み、なだめすかしてわたしはひたすら丘を登った。

なら次第に「他の使い道」などと、と自分はどうかしているのしか思えなくなってくる。それこそわたしも浸潤されつつあるせいに違いなく、だとすれば早急に手を打つべきだと思えていた。だが、わたしはそのことについて深刻にはなれず、放置しておけるこの緩み切った危機感こそ浸潤の影響に違いないとだけ留めおく。

乗せてカートは頂上へたどり着いていた。

斜面が途切れ、がらんだりの闇へ飛び出しかけたところでブレーキを踏む。

前のめりとなった体を押し戻し、背後へ振り返った。

遙か眼下、長らく辿ってきた闇越しに研究塔の灯りは見えて、あいだを遮る影だけが見当たらない。この時間帯なら大丈夫だと目をつけたことに間違いはなかったのだ。わたしは胸をなでおろした。

このまま頂の向こうへ回りこめば研究塔から私の姿は見えなくなるだろう。わたしは再びカートを走らせ、斜面が下りへ変わったところでヘッドライトを点けた。

その眩しさに瞳孔が絞れるまでしばらく。

やがて光の底からぼつねん、と薄ら白い塊も浮かび上がってくる。

まるで公衆トイレだ。

過つたとたん「急げ」と急ぎ立てる声は聴こえていた。素振りにはさもわたしのもののように、違うなら即座に誰だ、とわたしはカートのブレーキを踏みつけそちらへ注意を傾ける。

だが浸潤は穏やかで異変は異変ともくみとれず、己が意識へ潜れば潜るほど混濁してゆき、それこそ顕著な兆候だとわたしはゆっくりカートの手ハンドルを握りなおした。その触り心地で混じりけのない自分だけをそこから切り取ってゆく。

「ヒツジを始末しに行くんだぞ」

目的を声にして改め己へ刷り込みなおした。

公衆トイレなどと言えなくなったその壁際へ、静かにカートを添わせて停める。

かつては近づくに当たり防護服の着用が義務付けられていた時期もあったが、それも気休めだと分かっていた。誰もが白衣や普段着のまま出入りしているありさまだ。コトが終わればその足で街へ紛れるつもりでいた。たしも、そのままの恰好でカートの荷台へ回り込んだ。積み込んできたワラをかき分けライフル銃を掴みあげると、虫のたかる門柱灯が見えたところで尻ポケットからIDカードを抜き出す。セキュリティのスリットへ挿入しながら周囲へ視線を走らせた。

ロックの解かれる音は鈍く、飼育塔の入り口で鋼鉄製の扉がゆっくり左右へスライドしてゆく。奥からワラと独特の動物臭はあふれ出し、だとして死臭だけが嗅ぎ取れず、わたしは「まだ生きているぞ」と咄嗟に唇を弾いて呟いた。脳裏へひっそり暮らすヒツジの姿を浮かべ、しかしながら久方ぶりに訪れる輩の物騒なこの企みに可愛そうに、と言葉を過らせる。

いや、と目を瞬かせた。

同情するなど論外だ。

わたしはヒツジに近づき過ぎていることを自覚する。全開となった鉄扉に、灯る作業灯が進むべく通路を奥へ伸ばしていた。

飼育塔がここへ移動してから訪れるのは初めてだったが、構造に変更がないことは確認済みだ。臭いにはもう慣れるしかなく、わたしは最初一步を固く踏み出す。己の靴音で空間を満たし、時間が時間だ、ヒツジも眠っているなら好都合じゃないか。あんがい重いライフル銃を抱えなおして笑ってやろうと頬を持ち上げた。ここぞでうまくゆかずに終わったなら、通路を遮りはめ込まれた鉄格子の前で足を止めた。

その向こう側に明かりはない。サイロのような丸い飼育スペースの中、設えられた天窓のからの月明かりだけが囲う鉄柵を遠くにぼんやり、浮き上がらせていた。

もしかするとそのそばをヒツジは歩くのではなからうか。気にかかって視線を投げつつ、鉄格子にぶら下がる鍵の番号を合わせにかかる。引き開けて狭いそこをぐぐり抜けるべく身を屈めた。提げていたライフル銃が引っかかってはた、と感じた気配に振り返る。

とはいえ先ほどから靴音は己のものだけしかなく、そこに誰がいるはずもなかった。だというのに振り返った

わたしはわたしへ退路の確保こそ肝心だ、と投げ、その意図こそ掴めず、つまりこれは誰のための忠告なのかと疑い、出ぬ答えにしつかりしりとライフル銃を改め体へ添わせなおす。

緊張しているせいかわ、それとも元より立てつけが悪いせいか、暗がりを進むわたしの平衡感覚は危うい。やがて目の前に丸く囲われた柵は迫り、その外側にワラを、内側にもいくらかのワラ山と水飲み場を置いたヒツジの住処は現れていた。だがそれだけだ。肝心のヒツジこそ見当たらない。

探してわたしは右へ左へ視線を泳がせる。

盛られたワラと同化するようにならずくまるその姿に、ようやく気づかされていた。

ヒツジだ。

今年、一度も毛刈りをしていないせいで確実に一回り大きくなった輪郭が、凶鑑でよく見るそれとはまるで違っていた。ごわつく毛へワラ屑もまたぶら下がると、どこかおどろおどろしくさえある。

うかがい、見定め、わたしはなおさら慎重と歩み寄っていた。その足取りはぎこちなく、だからこそわけはない、ふっかけ証明してヒツジへ銃を持ち上げる。カ

チャリ、と鳴った音に眠っていたようなヒツジの耳は素早く回転して、ピン立ったとたん脇腹へねじ込まれていた頭がゆらり、抜き出されてゆくのを目の当たりとした。

呼応してわたしはピタリ、足を止め、前でヒツジは抜き出したばかりの頭を深く沈み込ませる。つけた反動は大げさなほどだ。ひと思いと立ち上がってみせた。その体は倍にも膨れ上がると、重たげにゆすってわたしへ振り返る。

様子にわたしこそ急ぎヒツジへ銃口を突きつけなおしていた。

だというのにヒツジは研究棟にいたわたしを覚えている、といわんばかり、目指して歩み寄ってくる。柵へ体を押し付けると離れた眼を剥き何をやねだって、懸命に鳴き声を上げた。

来るな。

わたしは唱え、しかしながら外しようがないなら今だ、と全身へ力を込める。

だがどうしてもだ。

どうしても引き金が引けない。

その触れそうな距離に撃ち損じなどあろうはずもな

く、だからこそ今だと力を込めれば込めるほどだった。額へ汗は吹きへ出し、手は震え、息は上がって何もかもがままならなくなる。様子にそれもこれも、だ。わたしはただ、それもこれもと思わされる。

それもこれも思いにもよらぬ臆病風が吹いたせいにほかならなかった。ただズドン、とやったそのあと訪れるだろう沈黙が恐ろしい。それほどまでにコトもなく終わるだろうこの殺生は残酷で、伴う罪悪感を、むなしさを、まざまざと感じ取る。いや、そうもあつてなく殺してしまえるのは実に無防備とヒツジがわたしを慕っているため、前にすれば可愛そうに、と言葉は漏れるほかなくなっていた。

銃はといえば反射的にかまえたただけの物だ。

下ろしてただ途方に暮れる。

閃きに、目を見張った。

罪悪感なく手を下すには、だ。この哀れなヒツジをこれ以上ないほど満たしてやればいいのではないか。思いつきは斬新で、なら引き換えに死を要求したところで許されるような気がしてならなかった。罪悪感も和らぐと、引き金も容易に引けるのではないかと思えてならなかった。

そう、部外秘の資料を失敬してきたのだ。いまさら何事もなかったように研究塔へ戻れるはずこそない。

決まった、と思えば体もすべらかと動き出す。手始めに鳴き続けるヒツジをなだめて頭へ手を伸ばし、撫でようと沿わせかけてヒツジに食らいつかれそうになったなら、つまり食いものが欲しいのだと察して積まれたワラを掴み上げた。そのくたびれ加減から寢床用のものかもしれないと思つたが、細かいことを問うている場合でない。ようし、ようし、でヒツジへ差し出す。

食いつくヒツジは正解だ、と言わんばかり、器用に動く唇を擦り合わせるとわたしの手からワラを次々奪り取っていった。

なくなつたところでライフル銃を柵へ立てかけ、わたしは抱えられるだけのワラを柵の中へ放り込む。小山とつたそこへヒツジはすぐさま頭を突っ込み、見下ろしながらわたしはそれこそ最期の晩餐だ、くれてやったわたしに殺されたところで恨みっこなしだぞ、と語りかけた。なら分かつた分かつたと相槌を打つように、ヒツジもまた頭を揺らしワラを食い続ける。

だが手を下すのはそうして腹いっぱいになった満足も頂点がいいのか、夢中になっている満足のただ中がいい

のか、今度は頃合いが分からなくなる。しくじれば薄まり始めた罪悪感が舞い戻りそう、しくじれないからこそ迷うあまり決断できず、わたしは奮い立たせてライフル銃をただ掴み上げた。

詰めた息でヒツジの頭へ狙いを定める。

もう満足に食つたか。

のぞき込む照準越しに問いかけた。

なんだ、まだ足りないのか。

呆れて、そろそろいいんじゃないのか。欲張る様に閉

口しつつ返事もまた待つ。

だが望む答えこそ返ってこない。

気づいた事実にくつ、とわたしの方こそ吐き捨てていった。何しろそのワラは寢床用かもしれないのだ。命と引き換えの晩餐には、あまりにもお粗末だった。

引き金に触れていた指は浮き上がり、その手でそうだ、とヒザを打つ。

もっともこの閃きの違和感に気づくことができたなら、わたしはそこで引き返すことができたろう。だが浸潤は穏やかで、異変は異変を伴わずわたしを蝕み、近づきすぎたわたしに気づけるだけの冷静さは望めなかつた。

うってつけのものがある。

ライフル銃を柵へ戻す。

わたしはこのために栄養剤さえ混ぜたのだとカートへ戻った。数分後、腕一杯にワラを抱えて柵の前に立ち、満を持して中へ投げ入れる。新しいワラは色さえ異なり見るからに上等そうで、選んだ素振りはなくともヒツジも積まれたそればかりを食い始める。

そうとも、食えば分かるはずだ。眺めてわたしこそ舌なめずりし、なら腹いっぱいまで、と心に決めた。

待つ間、立てかけたライフルの隣に腰を下ろす。柵へ背をもたせかけ、持て余した時間のまま空へアゴを持ち上げた。眺めて過ごせば時間は流れる速度を変え、埋めてまだかまだかの応酬はわたしの頭を埋め尽くす。

ならふと、この心持ちが何かに似ていることに気づかされていた。それは全くもって心地よい思い出というべきだ。包み込まれて小さく微笑み、しばしわたしはまぶたを閉じる。そこに出かける約束を交わしたあの日を、昨日のように思い出していった。

めかしこむ彼女はまだ美容院だ。表でわたしはそんな彼女をまだかまだかと待っている。

その角で黄色を点滅させて信号機は立っていた。傍らで待つ配達バイクは軽薄なまでの赤で、やがて青に変わって揺れる小花にはオレンジ色の花卉に紫がついており、そんなバイクと入れ替わりだ、白いバンは向こうから現れていた。クリーニング屋のそれと行き違った通りの人影がちょうど美容院の前にさしかかったところであついに、美容院の木戸は開く。店員に見送られて彼女は姿を現していた。

仕上がった髪の色に満足げな笑みを浮かべている。惹きつけられるままわたしは立ち上がっていた。

はずが、尻から這い上がる冷えに身を縮める。コンクリートゆえの底冷えだ。もう腰が鈍くうずくところまで染みこんできていた。堪えきれずまぶたを開き、どうやらいつしか眠り込んでいたことに気づかされる。

何てことだと思ふより、もうこれ以上、座っている気になれなかった。それこそ自分が飼育塔に閉じ込められた獣のような気分になって身震いしながら立ち上がる。さあもういいだろう。その背をヒツジへよじり愕然とした。

当然だ。それは上等のワラなのである。だのにヒツジは今や労働とばかり、そこでつまらなざげとワラを食んでいた。様子は怒りさえ覚えるほどで、なるほどこれごときでは引き合わないと言っているつもりか。怒りが嘆きに変わったところで、それも残酷なことを成そうとしている己自身に気づき、うろたえる。なら上等のワラは小さくするどころか罪悪感をまた一回り大きくさせ、もう手に負えない、言葉が全身を覆って塞いだ。なくした手立てに柵の前をひたすら行き来する。後戻れず、ましてや投げ出して帰るところこそないのだから狭間で目を血走らせ、訪れるはずもない助けを求めてわたしはしばし何事かを呟き続けた。

もちろんそのときわたしの脳裏に、それでも成し得ることで秘かにほつ、と胸をなでおろす職員たちの顔が浮かんでいたなら事態はまた違う結末を迎えていただろう。本社からこの罪悪感を吹き飛ばすほどの待遇が与えられることを思い出せていたなら、振り払い成し得る力も湧いていたことだろう。

だが「それ」は異変という異変を伴わず浸潤すると、いつしかわたしを変質させ、わたしのフリを決め込みわたしへ「次」を突きつける。

全うしたいなら見合うだけの罪滅ぼしを、今すぐここへ。

追い立てられてわたしは辺りを踏み散らした。立てかけていたライフル銃を蹴り飛ばし、音にヒツジが頭を上げたところで我に返る。

まったく使えない奴だ。

ゆっくりワラをすりつぶすアゴの上、横に長い瞳孔をおさめた瞳ごし、吐きつけるのを聴く。目の当たりにして後じさり、とどめとヒツジが喉を震わせた。

それが合図だとしか思えないのは、もう末期だからだろう。

証拠にワラを食むのをやめてヒツジもわたしへ歩き出す。その歩みで何よりヒツジを心底、満足させるものはまだ残されていることを示してみせた。

だからしてヒツメは柵の切れ目へ繰り出される。

気づいてわたしも誘われるようにそこへ手を伸ばしていった。

ヒツジの足は一度たりとも止まることはなく、止めさせないためにわたしもかけられた門をすり、引き抜いてみせる。開けばゆう、とヒツジは柵から抜け出した。慌てる素振りも微塵もなく、さも行く当てがあるかのよ



うに堂々と通路の暗がりへ後ろ姿を紛らせてゆく。潜り抜けた鉄格子の向こうに背を浮き上がらせたのもつかの間と、それすら見えなくなつたところで今度こそ、わたしの前から消え去つた。

こんな場所とおさらばできて、さぞ満足したことだろう。

見送りわたしは確信する。このうえない満足を与えたせいで膨れ上がっていた罪も消えると、これなら引き金は引けそうだと、立てかけておいたライフル銃へ手を伸ばす。見当たらずおや、と眉を跳ね上げたところでたちまち笑いに肩を揺らしていた。

もう堪えられない。

天へ向かいのけぞり笑つた。

どうやらわたしが襲われる運命にあつたのは罪悪感ではなく、あざけりだつたらしい。そうして一体、何を始末するつもりでいるのか。ヒツジを逃がしたのは紛れもない自分で、いいさ、笑いながらも今から追いかけるか、思うがその気力すら欠わいてこない。

わたしは顔へ手のひらを打ちつけていた。垂れた鼻汁ごとなでまわすと、ひたすら自分で自分を確かめる。だからむやみとここへ急いだ時、その根拠を疑つたのだと

思い出していた。可愛そうにと過つた時、不安を覚えたのだと振り返つた。それら異様な愛着はわたしをワラに固執させ、ハナから始末する気などなかったかのように安穩、眠り込ませている。

と、わたしは再び愕然としていた。

思い出だ。何しろそれは「わたしの記憶」ではない。だとすれば誰の、一体どの職員のものだつたというのか。知らぬ女の顔にわたしは目を見張り、叫びそうな声を殺して奥歯を噛んだ。つまり哀れでみすばらしいのは、まさにしてやられたこのわたしだと手遅れを思い知る。

ライフル銃は蹴り飛ばしたきり離れた所に転がっていた。

隠すためのワラにくれてやる予定などなく、だのに栄養剤さえ混ぜ運んだ理由こそ逃亡のための腹ごしらえだつたなら、つまりくれてやる予定にあつた弾は自らが食らうべく運び込んだ物なのか。

何しろ満足させてやつただけから、もう罪悪感など欠片もない。むしろ奪い取れるだけの権利を得たと確信している。

いや、混濁していないか。

だが今さら自分だけのものをより分けるなど泥から水をすくい上げるに近く、わたしは笑いながら腰を折った。

転がる冷えた銃身を拾い上げる。

それもこれもヒツジに近づきすぎたせいだと思うが、受けているだろう浸潤を後悔したところでそれもどこか他人事と実感はわいてこない。ただこれで我が社は、公となれば受けるだろう損害を回避できるはずだった。

考えながら背を柵に沿わせ座り込む。左足の靴を脱ぎ去った。

義務《シゴト》を果たせば、本社で評価と待遇が待っているのだ。

始末をつける。

当初の計画通り靴下も剥がして投げ捨て、銃身を両手で強く握りしめた。あてがって初めてアゴの下はこりこりと安定がないことを知り、銃口を咥えなおす。

どうしてこれほど簡単なことをすませるために、何と複雑な段取りをとってしまったのか不思議でならず、不思議なままが幸いと、遠ざかった引き金へ足先をあてがった。

満足したなら今度はこちらが満たされていい番だ。

めがけて飛び込むひと思いで、わたしは引き金を踏みつける。

夜が二つに裂けていた。

狭間を破裂音は駆け抜ける。

追いつかれてヒツジは丘で足を止めていた。上下の唇を器用にうごめかせながら振り返り、開いて長い舌を突き出し鳴き声を響かせた。

残し、ヒツジは歩き始める。丘をあと戻ったりはしない。鉄格子をくぐり抜けるさい振り返ったように退路の確保こそ肝心で、そのまま下るほうがいいことをすでに知っていた。

やがてその向こう、連なる山へ紛れ込む。

越えたところでふもとより這い上がる家々の屋根を見下ろした。そのいずれかに仲間が多くいることを、臭いとその能力で感じ取る。だからしてある日、住宅地の真ん中にひょっこり姿を現したヒツジの噂を聞きつけ何某が駆けつけたとして、その体から同じ臭いが漂えば慣れた手つきで誘う何某の餌を追うままトラックの荷台へ上がりこんでいった。扉が閉じられトラックが走り出そうとも落ち着き払い、残りの餌を食み続けた。

しかしそれは異変とも思えぬ異変を伴い浸潤すると、どこであろうと、誰であろうと、気づかぬうちに変質させる。凄まじさの理由は生命力を引き上げるためなされた操作のせいだとして、ヒツジであればなお「それ」に気づける道理はなかった。

ただトラックの荷台で揺られながら、そこで繰り返されている行為を暴かねば、と目を細める。台無しにして本社へ戻ればそれは類まれな成果と評価される予定にあり、それこそが己に課せられた仕事《ギム》だと短く鳴き声を上げた。

乗せてトラックは坂道を下る。

両側へ豪邸は建ち並び、さらに抜けて川を渡った。

黒い流れの向こうにやがてすたれて長らく経った工業地帯は広がると、錆びついたシャッターと鉄くずの放り込まれたドラム缶を連ねる。三階建てのパネ工場前だ。そこでトラックはブレーキを踏んでいた。

辺りには鉄と油の臭いが充満していたが、まだ仲間はずれに思える、と生きる、と思える。

ヒツジには、死臭だけが嗅ぎ取れないでいた。